



第461回 9/2 やまと国際フレンドクラブ (IFC)

会長 長谷部美由紀さん 会計監査 船越英一さん
IFCは2004年に大和市民活動センターのボランティアによって設立。今年で20周年を迎えます。当センターの広報紙「あの手この手」の表紙には、当団体主催の「やまと国際アートフェスタ」の入賞作品が毎号掲載されています。10月には第17回同フェスタがシリウスで開催されます。テーマは「守りたい、平和な世界」、小中学生の絵を展示し、来場者の投票で賞を決定します。

(10/4,5,6に開催済み) また、夏休みには「まなべ〜る」体験教室を開催、親子や学生ボランティアが機織りを体験しました。他にも「だべ〜る」や「インターナショナル・クッキング・フェスタ」などさまざまなイベントを開催し、7月には日本語スピーチ大会を行いました。「私たちが気づかなかった日本を発見したり、日本のよいところなどを聞いてうれしかった」と長谷部さんは話しました。

☆10月の出演 第463回 10/1 lagraine ラグレーヌ

第464回 10/15 福徳円満ボランティア しらもった 第465回 10/29 やまと国際オペラ協会

FM やまと 77.7MHz 第1.3.5(火) 生放送 9:00~9:30 同日再放送 15:00~15:30



第462回 9/17 いちよう下和田団地連合自治会

会長 遠藤武男さん
いちよう団地は横浜市と大和市にまたがり、昭和46年に建設され、遠藤さんは昭和48年から居住しています。平成18年頃から外国籍住民が増え、現在は10か国のルーツを持つ住民が2割を占めています。当初は文化や生活習慣の違いからトラブルが多発しましたが、サッカー大会や食文化の交流、地引網イベントなどを通じて関係が改善し、団地は「小さな合衆国」と呼ばれるほどになりました。30年以上にわたって会長を務めている遠藤さんは「これまでの活動を通して、言葉は分からなくてもジェスチャーや、相手を思う気持ちを持って日本語で話すと、必ず相手が理解してくれることを学びました。言葉の問題、文化の違いでいろいろあるが、どんなトラブルが起きた時でも、その解決に向けて『諦めない』ということが非常に大事ではないかと思っています。このことをみなさんにお伝えしたい」と語って、放送を終えました。



TSUBASA's トーク 第35回 外国人の私と、ベトナム人の彼ら

仕事で知り合ったベトナム出身の友人に会いに、首都のハノイを訪れた。夏の長期休暇を使った滞在中、友人の家族のホームパーティに招待してもらったことがある。床に敷いた敷物の上に大きな鍋と食材を並べ、それを4世代の大家族が囲んで座り、お喋りしながら飲み食いするスタイルだった。

鍋は鶏の出汁と砂糖で味付けしたような風味で、ホピロンと呼ばれる孵化前のアヒルの卵や、葉物野菜、豆腐などを、唐辛子の効いたタレにつけていただいた。飲み物は現地のビールとコーラだった。



家族の方々は日本語も英語もわからないので、友人の通訳以外では、身振り手振りと、即興で覚えたベトナム語(「美味しい」や「ありがとう」、家族の名前など)で精一杯やりとりしたのを覚えている。仕事の話や「結婚相手はいるのか」といったことまで、ご家族には様々尋ねられた。友人のお母さんが、調理について息子の友人と揉めて、目の前で脚をひっぱたいたのには驚いた。



賑やかなご家庭の雰囲気と温かい日常料理で、自分のような外国人をもてなしてもらえたことが、旅行中で特に嬉しい出来事だった。

ホームパーティの後、友人のオートバイに乗せられて近所の屋台にやってきた。出店の周りに小さなプラスチックのテーブルと椅子が並べられており、いつ連絡していたのか、友人の幼馴染みと、いともやってきた。小さなテーブルで柑橘系のジュースを飲みながら、ヒマワリの種をおかきのように食べてお喋りをした。



中でも体格の大きい幼馴染みには、ユーモアがあった。ベトナム語の会話についていけない僕に、彼はなんと日本語で自己紹介してくれたのだった。話の中で、「好き同士になりたい」という女の子の写真を見せてくれ、照れていたのが非常に好感を持っていた。

しかし、現地で参加した観光ツアーのバス内にて、次のような話もベトナム人のガイドから聞いている。

「私たちの国ベトナムは、今までに4つの国から大きな侵攻を受けているのを知っていますか。フランスからは植民地支配を受け、第二次世界大戦中には日本から、ベトナム戦争では北ベトナムがアメリカから侵攻されています。中国からもそのような歴史があります。」

英語のツアーだったので拙い訳になってしまうが、確かこのようにガイドは説明していた。フランス植民地時代の収容所も見に行ったが、実に人間に対してやってはいけないことが行われていたことを知った。それと変わらないことを自分の国も、今回出会った人たちの国に対して行っていたのか!

ガイドの話は続いた。「...ですが現在では、こうした国々との関係は完全に回復しています。今では彼らは私たちベトナムのパートナーです。」

もちろん日本人の私を気遣ったのかもしれないが、果たして自分なら、攻撃してきた国やその国の人々を「完全に回復 (completely recovered)」という言葉で赦せるだろうか、と想像した。やはり友人たちには頭が上がりません。(サポーター 尾畑翼)



大和市民活動センターは「大和市新しい公共を創造する市民活動推進条例」に基づいて設置されています。
「あの手 この手」 第207号 発行日：2024年10月10日 発行：大和市民活動センター 拠点やまと
大和市民活動センター <開館日 月~土 9:00~18:00>
<休館日 12月29日~1月3日・毎月第3月曜日>
〒242-0018 大和市深見西1-2-17
TEL:046-260-2586 FAX:046-205-5788
e-mail:yamato@ar.wakwak.com
http://www.kyodounokyoten.com/

あの手この手で考えて、あの手この手で問題解決!

あの手 この手

あの手この手のマークの間のSiは solution(解決)のSです。
第207号 2024年10月10日 大和市民活動センター[拠点やまと] 発行

10月号
2024



ベテルギウス玄関
10月3日の生け花



表紙絵は「やまと国際フレンドクラブ(IFC)主催
やまと国際アートフェスタ 入賞作品を毎号掲載しています
今回のテーマ「ここから、未来へ」
国際ソロプチミスト柴胡賞受賞
藤澤 杏さん 北大和小学校4年生(当時)

メッセージ みんなで楽しい世界。国がなかよし
タイトル 平和が聞こえる

☆「やまと国際アートフェスタ」は、「やまと国際フレンドクラブ」(IFC) *の主催で毎年開催されています。
*「IFC」は、草の根の国際交流、外国人支援を行っている、「ともにくらすまち大和」を考えるボランティアグループです。

大和市民活動センター 第109回 共育セミナー
不登校・ひきこもり・ニート問題等
つまずいたから見える景色がある。
その景色の先には、希望の光(ぜんしん)があった!
日時 2024年11月2日(土) 14~16時
場所 大和市民活動センター

お話 柳川 涼司 さん
(特定非営利活動法人
ぜんしん 理事長)



不登校やひきこもり等
を経験したスタッフ
が中心となり、
寄り添いながら
自立支援を行って
います。

定員：25名(先着順)
応募締切：10月30日(水)

大和市民活動センター第17回 カッコフェスタ
「ベテルギウスまつり」の一環です。
参加団体・支援サポーター 募集中
日時 2024年12月15日(日) 10~13時
場所 ベテルギウス 館内

今年は
ステージ
(2階踊り場)
を使っ
ての
団体パ
フォーマンス
を予定
します。



登録団体による
★ 出店
★ パフォーマンス
★ 掲示
★ 活動報告など

参加団体名・活動内容・レイアウト等
同封チラシをご覧ください。

大和市の多文化共生の推進を担っている大和市国際化協会の設立が検討されていた 1990 年代の初め、外国籍市民が 1,700 名ほどだった大和市に、鈍化する経済成長を下支えする存在として期待され、南米から転入した「デカセギ」の日系人は、年間 500 人を超えていました。経済の影響を最前で受け、その時々で増減してきた外国人市民に、日本は、持続可能な社会を支える人材として、今また大きな期待を寄せているように見えます。現在、大和市に暮らす外国籍市民は、8,300 人を数えるまでになりました。「ダイバーシティ」「多様化」といった前向きな言葉とともに、理解し合おうという社会の雰囲気も醸成され、当時には考えられないほど、理解も進み仕組みも整ってききましたが、世界に目を向ければ、あちらこちらで、「壁」「分断」といった言葉に象徴されるバックラッシュに見舞われているのも事実です。

大和市国際化協会は設立から 30 年を迎える中で、このようなひとくくりの数字や言葉に表されるだけのものではなく、顔と名前を持つ一人一人の人とともに歩んできたそうです。泣いたり、怒ったり、喜んだり、寂しさの中にいる外国人の一人ひとり、驚き困惑したり、新しいものを喜んで楽しんだり、温かい心を寄せ見守ったり、労わり支える多くの市民を、「これまでの経験をもとに行政、企業や団体、市民をつなぎ、協働して、様々な文化や個性を持った人たちが、互いを認め合いながら、それぞれの持つ力を発揮して、豊かな社会づくりに貢献できる環境を整えることで、国際社会の平和と発展に寄与できるよう取り組んでまいります」と機関紙 PAL2024.6 月号で表明しています。

大和市の国籍別外国人数（2023 年 12 月末日現在）

- ① 中国 1,628 人
- ② ベトナム 1,544 人
- ③ フィリピン 963 人
- ④ ペルー 706 人
- ⑤ 韓国 685 人
- ⑥ ブラジル 292 人
- ⑦ インドネシア 271 人
- ⑧ ネパール 271 人
- ⑨ カンボジア 227 人
- ⑩ タイ 190 人
- ⑪ その他 1,292 人

大和市には、88 の国と地域、8,044 人の外国籍住民が在住しています。この数は県内自治体では 5 番目に多いです。その分、言語や文化も多様なので、情報提供や相互理解のために努力を払う必要があります。また、そのうちの約 50% が永住者（特別永住者を含む）で、一時的に日本に滞在しているのではなく、これからも長く暮らす地域の一員であることから、このような住民同士の地域の活動は市内のどの地域でも必要です。

この項、（公財）大和市国際化協会の HP 参照

本号 4 p に、遠藤武男さん関連記事があります

この項の編集：船越 英一、イラスト：望月則男

がいらっしゃいますし、子どもたちもいます。だから、いちょう下和田団地ならではの活動の花が咲くのではないかと期待しました。

県営いちょう下和田団地での活動実践
（以下の写真は、遠藤武男さんの講義資料から）



境川を挟んで大和市と横浜市にまたがる県営いちょう団地。でも、多文化共生によって、住民同士の交流は深まる



スポーツによる交流は、ルーツの異なる人たちが仲良くなる第 1 歩



Comida peruana acerca a los vecinos de Ichodanchi

Es uno de los barrios municipales más grandes de Kanagawa

may popular en su país el gó de gaita, el bano achado y la chita morada. Además ofrecieron platos típicos para comenzar la tarde de intercambio cultural.

Jenny y sus padres, de familia peruana de la zona se entregaron al proyecto con mucha ilusión y sacrificio. Después de salir del trabajo y de la escuela, Jenny, Pauli, Mariana, su compañera y compañera de baile, y los niños del grupo "Mi Perú" organizaron la merienda y los buñuelos que fueron el delicia de todos.

La reacción fue emocionante. Las amas de casa japonesas, muy curiosas, aprendieron a sacar las conchas y hasta la forma de subirlas en un plato, participaron muy contentas y colaboradoras.

"Para convivir en armonía se debe de conocer las virtudes y los defectos de cada uno y así tolerar y respetar a las personas con quien convivir", dijo Tada al explicar el espíritu de la actividad. (Asesma Palacios/IPC)

ellos, fueron LAS AMAS DE CASA JAPONESAS APRENDIENDO A preparar el GALLINA Y COMO SACARLOS

dician en esta vecindad que es tan grande que una parte está construido en terrenos de Yokohama y la otra en Yamato. Según su papá RFC, la mayor concentración de familias está en el lado de Yamato donde residen unos 2.234 familias que se reparten en edificios que fueron construidos en 1970. Esta zona fue escenario del festival gastronómico dedicado a Perú.

ellos, fueron LAS AMAS DE CASA JAPONESAS APRENDIENDO A preparar el GALLINA Y COMO SACARLOS

ellos, fueron LAS AMAS DE CASA JAPONESAS APRENDIENDO A preparar el GALLINA Y COMO SACARLOS

ellos, fueron LAS AMAS DE CASA JAPONESAS APRENDIENDO A preparar el GALLINA Y COMO SACARLOS

ellos, fueron LAS AMAS DE CASA JAPONESAS APRENDIENDO A preparar el GALLINA Y COMO SACARLOS

食文化交流事業を開催したことがペルーの新聞に掲載された。食をとおした多文化を理解する基本



多国籍の団地の住民に囲まれて、笑顔の遠藤さん

共育セミナー

トラブル続きの多国籍団地が、みんな楽しく暮らす「小さな合衆国になったよ！」

スピーカー 遠藤 武男さん（県営いちょう下和田団地連合自治会長）
照屋 カティウスカさん（ボリビア出身）

9月21日に開催しました

開催報告



今回の共育セミナーは、「地域における多文化共生の実践と課題を考える」という観点から、長年「いちょう下和田団地」において、「外国人も同じ団地に住む仲間」として、公平に寄り添って来られた遠藤武男さんに、「外国籍住民の方との地域交流について」のテーマで報告をいただいた後、団地の外国ルーツの住民代表として、ボリビア出身の照屋カティウスカさんにも加わっていただき、参加したみなさまとの質疑応答（ワークショップ）の時間となりました。

が親に伝えたら、正しく出してもらえるようになったということ。何度もお願いしたとのことだが、なぜ伝わらなかったのだろう。どういう伝え方だったのだろう。

日本人は「郷に入っては郷に従え」ということをすぐに言うとのことだが、その「郷」のルールを誰が、どう伝える？ 言っている人には「来た人が察して守るべきである」という気持ちがないか。この「郷」のルールも時代とともに変わるだろう。などなど、取り留めなく考えましたが正解のない難しい問題ということを再認識したのみ。

遠藤さんが活動を始められた当時、仲間は 2 人で、その後 4 人に増えたが、今は遠藤さん一人だけで、日本人住民の高齢化で自治会活動ができる人が減っているとのこと。（自治会活動ができなくなっているのはどこの市町村でも同じで、自治会の加入率も減少している）

遠藤さんのお話ではいちょう下和田団地は、住民の 2 割ほどの方が 10 か国にルーツを持つ外国籍住民の方で、住民のほとんどの方が自治会に加入されているとのこと。このような自治会は少ないと思う。外国籍の方々も同じ住民のひとりとして、自治会活動に参加してもらおうとされているそう。

お願いに行ったら「私、日本語分かりません」と日本語で断られることもあるとのことですが、外国籍住民の方々から夏まつりで、その国の売店を出したいというようなお話が出ていたと聞きました。子どもたちが楽しめる駄菓子まつりもされたとか。

遠藤さんは頑張って来られましたが、これからは活動の継続が難しいかもと言われていました。

しかし、遠藤さんたちがつないで来られた照屋さんたち

セミナーレポート 櫻井 美紀子

遠藤武男さんと照屋カティウスカさんのお話を伺いながら、地域住民の交流についてあれこれ考えました。

同じ日本人同士でも難しいのに、異文化の方との交流では、言葉・習慣・宗教などの壁はより高い。遠藤さんは、言葉が分からなくても相手を思う気持ちを持って日本語で話すと、必ず相手が理解してくれると言われる。そして、「会長は何を考えての？（企画が）外国人ばかりに集中していないか？」などと言われるながらも、50 年間、活動をされてきた。セミナーに出ておられた同じ団地の方が、遠藤さんだからできたと言われていた。誰にでもできることではない。

照屋さんは、明るくて積極的な方で、率直にご自分のことや国民性などを話された。彼女はどなたとでもよい関係を作られるのではないかと思います。

ゴミの出し方についてのエピソードで、何度もお願いしたが、守ってもらえなかった。しかし、子どもが学校で環境問題について学び、大和のごみの出しルールを子ども